

|                       |          |    |
|-----------------------|----------|----|
| 話題の治療                 | 榮枝弘司     | 2  |
| 地域医療講演会報告             | 竹之熊哲也    | 3  |
| 管理職基本研修               | 近森正康     | 5  |
|                       | よさこい祭り   | 6  |
| 編集会議出席                | 宮島功      | 8  |
| 日本医療マネジメント学会高知県支部学術集会 |          | 9  |
| 人物ルポ                  | 323 津田昇一 | 11 |
| 近森病院病院ツアー             | 上田英輝     | 12 |



## 若い力を結集して

近森病院院長 近森 正康

### 各施設が最高のパフォーマンスを

近森会グループ全体の全面増改築工事が2016年に終わり、近森病院はヘリポートを有する452床の高度急性期病院として機能、規模共に充実し、近森リハビリテーション病院は江ノ口川南岸に新築され先進的な回復期リハビリテーションを展開、近森オルソリハビリテーション病院と近森病院附属看護学校も改築移転をしました。それぞれの施設がステージ毎に最高のパフォーマンスを発揮できる舞台となり現在フル稼働しています。

### 選択と集中・機能分化

近森会グループは「選択と集中」、「機能分化」をテーマに、病院の改革を行ってきました。急性期と回復期を病院単位で分離し、それぞれの機能を絞り込むことで医療の質と労働生産性をあげ、高規格病棟と一般病棟に機能を分けることにより、スムーズでしなやかな病棟連携を実現し、重症患者さんへの対応と看護師の労働環境の改善を行っています。急性期医療は救命救急医療に特化して、循環器、神経疾患、外傷分野で県内トップシェアとなっています。

高齢で多くの問題を抱える患者さんを早く治して元気に自宅に帰ってもらうには、多くの業務をこなさなければなりません。従来の医師、看護師中心の医療では全ての業務量をこなすこと

は非常に困難で、そのため当院では多職種による多数精鋭の病棟常駐型チーム医療を展開してきました。

業務をそれぞれの専門職に委託し、それぞれが自立自動することにより、「医師は医師にしかできないこと」、「看護師は看護師にしかできないこと」に専念することができています。この病棟常駐型チーム医療と病棟連携の組み合わせは、これからの急性期医療における最高のビジネスモデルであるといえます。近森病院はこれらのマネジメントで公立病院の繰入金分の収入を得ていたといっても過言ではないでしょう。

### 診療報酬改定による減収から 黒字基調への転換

しかし、2016年4月の診療報酬改定で、7:1病棟ABC25%ルールやICU80%ルールなどのアウトカム評価が本格的に導入され、当院でも稼働率の低下が起こり、大きな減収となりました。8月には前院長が主任以上の全職員を集めて危機の共有と救急や紹介の受け入れを増やし稼働を上げること、徹底したコストの削減を行うように説明がされました。

その後「救急受け入れ推進ワーキンググループ」、「在院日数短縮ワーキンググループ」を順次開催し現場で救急医療を行っている若手のスタッフの忌憚ない建設的な意見が出て、改善につながってきました。同時にコスト全体の

徹底的な見直しも行ないました。全職員の協力もあり、9月以降の収支は安定して黒字基調となり、職員の皆さんの多大な協力に、深く感謝しております。

2017年1月から私が新院長となり、川井先生、入江先生が副院長となりました。いずれも最前線で臨床業務を行っており、現場に即した細かなマネジメントを行っていきたく感じています。

2018年4月には医療介護同時改定が行われます。第7次医療計画も公表され、今後どのように医療界が変化してくるか予測は困難ですが、更なるアウトカム評価が進み各病院の機能が固定化され、それに入らない病院は立ち行かなくなることは間違いないと思われます。

### 若い力を結集して

近森病院が急性期病院として、近森リハビリテーション病院、近森オルソリハビリテーション病院が、回復期病院としてしっかりと生き残るためには、全職員の皆さんの更なる協力が必要不可欠です。これから先の30年間、最高の医療を行なえる舞台は整いました。若い力を結集してこの厳しい時代を乗り越えていきたいと思っておりますので、これからもどうぞよろしくお願いたします。

ちかもり まさやす



## C型肝炎は飲み薬で治す時代へ

近森病院消化器内科

主任部長 榮枝 弘司

1989年にC型肝炎ウイルス(HCV)が発見され、現在、感染者は日本で約200万人、世界中で1億7000万人にのぼり、その多くが慢性肝炎から肝硬変へと進行し、高率に肝細胞癌を発症します。

日本人のHCVは、遺伝子型1bが7割、遺伝子型2型(2a、2b)が3割を占め、1992年インターフェロン単独治療(24週間)が保険適応となるも、

1b型のHCV排除率(SVR)はわずか5%でした。

その後の進歩により2005年からペグインターフェロン皮下注射とリバビリン併用が標準治療になりましたが、1bかつ高ウイルス量例(48週間)でSVR50%、2型(24週間)で約85%と、特に1b型は難治でした。しかも副作用が強く、鬱病や腎障害、高齢者には投与できませんでした。しかし経口剤の直接作用型抗ウイルス剤(DAA)が開発され、2014年9月DAAによる24週間投与が1b型に認可されました。

2015年には更に効果の高いDAAの

1b型、2型への12週間投与が認可され、SVRもそれぞれ98%、96%と高率で、副作用も軽微で高齢者でも安全に投与できるようになりました。

このようにC型肝炎治療は劇的に変わり、飲み薬でHCVを駆除できる時代になりました。しかし日本にはHCV感染に気付いていない、あるいは感染を知っているが受診しないキャリアーが、50万～100万人存在すると推定され、これらの人々を受診勧奨し、治療につなぐことができるかが大きな課題となっています。

さかえだ ひろし

## 9月の歳時記

### キンモクセイ

近森病院臨床検査部

臨床検査技師主任 森 綾

キンモクセイと言えば甘い香りが印象的ですが、花言葉は「謙虚」「気高い人」。甘くすばらしい香りに反し控えめな小さい花をつけること、雨が降ると潔く花を散

らせることに由来するそうです。まだまだ暑い日も続きますが、風によって届くキンモクセイの香りから秋の訪れを感じてみてはいかがでしょうか。

もり あや



## ● 近森看護学校通信 19 ●

### オープンキャンパス開催報告

6月17日(土)に、平成29年度1回目のオープンキャンパスを開催しました。当日は保護者を含め40名の方に参加いただきました。

参加者からは、学校の雰囲気やボ



ランティアで参加した学生の対応が良く、看護に触れる経験ともなり充実した一日を過ごせたとの声をいただきました。とくに個別相談コーナーは、教員や学生から学校生活や勉強に関する話が聴け、たいへん参考になったと好評でした。

今年は7月の追加開催を含め、あと3回開催します。多くの方に参加してもらえよう広報活動を行っていきます。

上甲浩道

## 名画とピアノのコラボレーション

### ゴッホ、太陽は燃えつきたか

ベルギー王立美術館公認解説者による、名画解説とともに、ピアノ即興ライブをお楽しみください。

名画解説：森 耕治氏

ピアノ演奏：鍋島 佳緒里氏

日時：11月26日(日) 開催時間 14:00～

会場：近森病院附属看護学校3階ffホール

※詳細は10月号にてご案内します。





## 顔の見える連携を大切に『つなぐ』役割を！

近森リハビリテーション病院地域連携室  
シニア看護師長 岡部 美枝

平成24年4月1日より、『近森リハビリテーション病院 地域連携室』を開設し、6年目を迎えました。前任者から入院相談窓口としての役割を引き継ぎ、『地域連携室』としてどのように役割を果たしていけばよいのか、手探りの始動だったことを思い出します。

入院相談窓口の役割は、急性期病院からいただいた情報をもとに、医師・看護師・セラピスト・ソーシャルワーカーとともに、入院適応について検討し、病院全体の病床コントロールを含めた受け入れ態勢の調整と支援を行うことです。つまり、患者さん・ご家

族に適切なケアやリハビリテーションサービスを早期に提供できるように、急性期病院と回復期リハビリテーション病棟を『つなぐ』ことが私の役割だと思っています。そのひとつが、近森病院への往診です。医師・セラピストとともに往診に伺い、患者さんの全身状態や生活歴、リハビリテーション実施後の方向性などの情報収集をおこないます。スタッフ間での顔の見える連携はもちろん、患者さん・ご家族に直接お会いし、入院・治療についての説明や質問に対応し、『つなぐ』役割をおこなっています。また、外来訓練の相談や在宅生活の調整の相談にも対応



し、患者さんやご家族の地域での生活を支える役割も、地域連携室の『つなぐ』役割です。

今後も、回復期リハビリテーション看護師としての知識や地域連携業務に携わってきた経験を、『つなぐ』役割にいかし、住み慣れた場所で生活する支援ができるよう、急性期病院や地域の関係機関の皆様と顔の見える関係を築いていきたいと思っています。

おかべ よしえ

### 第157回 地域医療講演会報告

2017年8月4日



▲筆者左側

8月4日、「総合診療医ドクターG in 高知」に同期の大貫先生と参加しました。

大阪医大の鈴木富雄先生と県内の研修医で、本物のドクターGさながらの症例検討を行ないました。病歴から疑わしい疾患や見逃したくない疾患を

### 症例検討の難しさと大切さ

初期研修医2年次 竹之熊 哲也

挙げ、追加の問診や検査結果から絞っていきます。

鈴木先生の診療に対する考え方だけでなく、他病院の研修医の意見も聞けて、貴重な経験ができました。今回の症例では、「よくある疾患でも非典型的な症状を示すことがある」という心構えを持って診察することの重要性を痛感しました。

実際の臨床現場では、ひとりの患者さんについてここまで時間をかけるこ

▼講師 大阪医科大学 附属病院総合診療科の鈴木富雄教授 ▼座長 佐野内科リハビリテーションクリニック院長の佐野良仁先生



とは難しいですが、今回学んだことを今後の診療に、活かしていきたいと思っています。 たけのくま てつや



近森会 **そると** 保育室

「そると」に絵本の寄付をいただきました。ありがとうございます！





## Case Presentation Award で 優秀賞受賞

近森病院  
心臓血管外科 田井 龍太

2017年6月22日、23日に大阪で開催された、第60回関西胸部外科学会に参加し、Case Presentation Award(CPA) 心臓後天性部門で優秀賞を受賞することができました。40歳未満の若手が対象で、発表態度や時間の使い方、スライドの見せ方など、聴衆にわかりやすく伝えられるかどうかの評価の項目でした。

私自身、プレゼンテーションは得意と自分で思っていますが、非常に珍しい症例であったのでうまく伝わるかと不安でした。結果的に優秀賞ではありますが、受賞できたということはちゃんと伝わったのだと自己解釈しています。副賞で賞金をいただきましたが、



お土産にすべて消えてしまいましたので、次回は最優秀賞を目指しもっといいお土産を買ってきたいと思います。

たい りゅうた

### ■ 私の趣味 ■

#### 今いちばんは、裁縫「物づくり」ーバッグを自作ー

株式会社スマサポ保育室そと 竹村 早織



長年続けている趣味というものはとくになく、興味のあることは「とにかくやってみる！」精神で、色々なことに取り組んできました。お菓子作り、ウォーキング、ヨガ、ベランダ菜園、登山など、いろいろありますが、以前から好きで最近特にはまっているのは裁縫です。

もともと細かい作業や自分で考えて物を作ることが好きだったこともあり、昨年「一生ものだから！」と意気込んで良いミシンを購入しました。その後、そのミシンを存分に活用した裁縫「物づくり」が今の一番の趣味になっています。

買い物に行き、バッグなどを見ても、「これはどうやって作るのかな」という目線で見てしまい、簡単な形のものをはなかなか購入にはいたりま



せん。しかし、自分で作るということは、大きさ、形、色、素材、内ポケットの数まで自分が気に入るように、使い勝手が良いように工夫したバッグを作ることができます。一つひとつの物に思い入れができ、大切に使うことができています。

現在は、夏に向けてかごバッグを



作成中ですが、これからも色々な物を作っていきたいと思っています。目標は、胸をはって家族や友人にプレゼントできる物を作れるようになることです。その為に、これからも色々な裁縫「物づくり」に挑戦していきたいです。

たけむら さおり

## 管理職基本研修

2017年7月20、21日 / 7月27、28日 / 8月29、30日

◀講師 エデュネット協会の江藤かをる先生



今年度の管理職研修は、エデュネット協会の江藤かをる先生を講師にお招きして、医師を除く全職種の部科(課)長、看護師長以上の管理職を対象として開催しました。

「管理職とは何か」ということから始まり、人材育成のあり方や具体的な手法を中心に研修が行われ、“目標で人を動かす”をキーワードに部下の帰属意識やモチベーションの持たせ方、正当に評価することの重要性を学びました。

参加者は、丸2日間の研修のなかで

## 管理職基本研修を開催して

近森病院院長 近森 正康



他職種の管理職同士でグループディスカッションを行い、いろいろな悩みや工夫を共有しました。さまざまな立場や状況があるなかでの指導法やマネジメント法を共有することにより、今後の目標を明確にすることができたようです。 ちかもり まさやす



## ザ・RINSHO

## 管理部総務部 秘書課



## きめ細やかに柔軟な対応で現場支援ができるように

▼カンファレンス記録作成 (左端白衣2名が秘書)

総務部秘書課  
課長 和田 有紀子

秘書課は発足当初30名でスタートしましたが、組織の拡充に伴い業務の幅も拡がり、人員も増えて現在41名の女性ばかりの部署です。

各院・各診療科の秘書は、医師の指示の下で外来診療や回診のサポート、データベース入力、学会・研究会のための資料作成補助や研究・調査のサポート、カンファレンスの記録作成、

研修プログラムの作成補助など、多忙な医師の業務負担軽減につながるように求められる業務は多様です。

看護部では看護部職員管理に関することや届出等に関する書類作成など、管理部では各種書類処理、全体の出張管理・手配、地域医療支援病院運営委員会の準備なども行っています。

秘書課は配置部署により業務内容が



様々ですが、一緒に働く仲間たちとのコミュニケーションを密にして、きめ細やかに柔軟な対応で多忙な現場をサポートできるよう努力していきたいと思っています。

わだ ゆきこ

## お弁当拝見 53 残さず食べること



近森病院北館5、6階病棟  
看護師 萩原 順児



学生時代の12年間、母は毎日休むことなく朝早くからお弁当を作ってくれました。仕事もしていたので、睡眠不足ではと子ども心に感じたのをいまでも覚えています。

私は母のように出来ませんが、朝少し早く起き節約を兼ねて可能な限りお

弁当を作る様にしています。“彩り良く”を意識していますが、残り物だけの日はぱっとしません。

気分転換を兼ねて職場の食堂の利用もしますが、やっぱりお弁当が美味しく感じます。母を尊敬、感謝しつつ、お弁当



作りを楽しみながらやっていきたいと思っています。

はぎわら じゅんこ

よさこい、お疲れさまでした！



## 有志の力で8年連続出場

よさこい実行委員会代表  
近森病院 7A 看護師 日浦 由美子

昨年をもって出場休止が決まっていた「ちかもり」ですが、人と人が繋がる縁を大切に、よさこいの楽しさを伝えたくて有志が5人集まり、8年目の「ちかもり」よさこいを継続することが出来ました。

今までと違う形で始めたよさこいだったので、一からのことが多く、いつしか楽しむことを忘れそうになりましたが、歴代代表やスタッフに支えられ本祭を迎えることが出来ました。また、当日は、沿道からの声援を受け、踊り子さんも心からの笑顔で「ちかもり」らしい一体感のあるチームになったと感じました。今年「地方車奨励賞」もいただき、7年ぶりに受賞という有終の美を飾ることが出来ました。

樽募金へ協力いただいた職員の皆さん、協賛企業の皆さん、チーム作りに関係して下さった業者の皆さん、すべての方々に心より感謝いたします。



ひうら ゆみこ

青枠内の写真撮影 宮崎延裕



青枠以外の写真撮影協力 見元尚、山口泰史



## ふれあい看護体験を実施しました

今年も近森会グループにおいて、高知県看護協会事業の「ふれあい看護体験」を実施しました。台風の影響もあり、4日間46名の高校生を受け入れました。毎年参加希望者が増え、「看護師になりたい」「看護を知りたい」という意欲のある学生に参加してもらっています。

グループ3病院に分かれての病棟体験、手術室やERの見学体験、バイタル測定体験を実施してもらいま

した。体験のなかで実際に患者さんとお話したり、普段入ることができない手術室で手術着を着て手洗い体験をしたり、最初は緊張しながらも熱心に取り組み、体験後は貴重な体験ができたと喜んでくれました。

この体験を機に“看護の道”を選択してくれたらと期待しています。



### 編集会議への出席

2016年12月12日

## 「臨床栄養」の編集に携わって

近森病院  
臨床栄養部主任 宮島 功



昨年12月に熊本県の熊本リハビリテーション病院にて、「臨床栄養」の臨時増刊の企画編集会議に参加致しました。「臨床栄養」は1952年創刊で管理栄養士や栄養に興味のある医師やコメディカル向けの月刊誌です。今回“低栄養”をテーマとした特集号の発刊にあたり、企画編集会議に参加しました。編集会議では、熊本リハ

ビリテーション病院の吉村芳弘先生を中心に編集メンバーが集まり、まず特集号の大項目（パート）および小項目の検討をしました。その後46ある小項目すべてに執筆依頼者を割り当て、特集号のタイトル、読者対象やページ数などを一から検討しました。

雑誌タイトルは、「低栄養対策 パーフェクトガイド」に決まり、大項目は、より多くの方に購読して頂きたいという思いから、「低栄養の最新知識」「セッティング別」および「病態別 低

栄養マネジメント」「多職種による低栄養のアプローチ」「高齢者を支える栄養ケア実践例」の5パートとしました。幅広い分野をカバーし、初級者～中級者を読者対象と想定し、各専門領域の最前線で活躍されている執筆者の先生方に、疾患別やセッティング別に低栄養の病態の基礎を解説いただき、具体的なアプローチ方法を提示できるよう一冊になることを目的に企画しました。

雑誌の企画段階から携わることが初めてでしたので、非常に良い経験となりました。多くの方に今回の特集号を手にとって頂き、この雑誌が低栄養患者さんへの対策のヒントとなることを願っています。

みやじま いさお



### リレー エッセイ

## 空想と現実を楽しむ

高知ハビリテーリングセンター  
臨床心理士 岩崎 由利恵

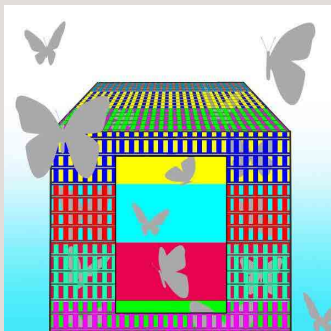


皆さんは『赤紫』という色をご存知でしょうか。秋桜やサフランの、あの色です。しかし光はスペクトルなので、赤の隣に青や紫の可視光は無く、物理的には存在しない色ということになります。

申し遅れましたが、私は心理士をしています。人にはよりますが、「分からない事を知る喜び」が学問の醍醐味の一つならば、心理学ほど当てはまる学問もないのではないかと密かに思っています。心理学は「心」と「行動」が研究対象なので、裾野の広い学問です。またアプローチの仕方も、一つは理論から個人や地域の課題を援助する「個別性」、もう一つは実験か

ら一般法則を探す「普遍性」と、大きく分かれています。前者なら恐怖症に対しカウンセリングなどを、後者ならば通常の恐怖との差異を研究する、といった具合です。

私は元々は後者で、「見えたり聞こえたりすること（知覚）」自体が不思議でした。画像の蝶達は何色に見えるでしょうか。実は全部同じ灰色なのです。こうした現象を「錯覚」と呼び、発生する条件から「いかに外の世界を認知しているか」を研究していました。今は趣味程度ですが、常に新しい



発見があり、「私が知っている事は、私が何も知らないという事だけだ」という言葉の偉大さを感じる限りです。

錯覚は脳が賢く、効率的に、環境に適応する素晴らしい戦略の一端を、私達に教えてくれます。現実だと思っているものが実は事実ではない、そんな不思議な空想と現実と連れ出してくれる心理学に、是非触れてみてはいかがでしょうか。

いわさき ゆりえ



## 地域包括ケアへの高い関心

近森病院院長 近森 正康

8月20日に高知市春野ピアステージにおいて、「地域包括ケアとリハビリテーション」をテーマに開催されました。近森会グループからは全77演題中、13演題と最多の発表数でした。看護師をはじめ、ソーシャルワーカー、管理栄養士、薬剤師、放射線技師などの多職種が、各々の研究を報告してくれました。

地域連携センター長の市川博源先生



からは他法人との密接な地域連携である「アライアンス連携」の発表をいただき、フロアから活発な討議が行われました。

会は全体的に非常に盛況でしたが、特にテーマにある地域包括ケアや地域連携、退院支援のセッションでは聴講者も非常に多く、関心の高さを感じました。

ちかもり まさやす



### 第7回心臓血管ウェットラボ

豚の心臓を使いリアルな体験ができることから、毎回県内外からの参加者が多く、すぐに定員オーバーとなる人気の講演会(実習編)です。医師はもちろん看護師、薬剤師、事務など職種にとられずに多くの医療スタッフが参加します。参加は事前申込が必要となります。応募者多数の場合は抽選とさせていただきますので、ご了承ください。

日時 11月12日(日)9時から15時(予定)  
会場 近森病院管理棟3階 大会議場  
参加費 1,000円 昼食付き  
申込 9月25日(月)～10月31日(火) 正午



### ワイン講座 ● 55

#### ぶどう品種を知り、個性を探る 白ぶどう その35 ポルトガル篇

##### マデイラワインを楽しむ スペースのご紹介

マデイラワインの一般的なご説明はさせていただきますましたが、ではどんな業態の店で楽しむ事が出来るのが気になるところです。

マデイラは非常に多彩な飲み物なのですが、レストランやワインバーで飲む場合でも、1種置いてあるかどうか、というのが問題です。

そんなマデイラを、3年熟成から1850年ヴィンテージに至るまで、贅沢にもグラスで100種も楽しめるマデイラワインバーがあります。

このバーは、ワインの輸入元がマデイラワインの本来の魅力伝えるため、ここでマデイラが飲めるだけでなく、提案型情報発信基地にしていくということですか

マデイラ・ヴェルデーリョ 1850年/ベレイラ・ドリヴェイラ/ポルトガル、マデイラ島●この年はペルーが黒船を率いて浦賀に航する3年前のヴィンテージ。現在弊社のストックで古いものは1850(167歳)、1912(105歳)、1937(80歳)年があります。ワインでは考えられないほどの古酒で一度は味わってみたいものばかりですが、相当の勇氣と、数か月分のお小遣いが必要です。

ら、心強い存在です。

ポルトガル料理を中心としたお食事やチーズやスイーツとのマッチングなど、個性豊かな味わいをお楽しみいただけます。

ここは唯一無二のマデイラ専門のバー。日本で唯一と言っても、現地ポルトガルにもこんなスペースは存在しないのではないのでしょうか。

気軽に立ち寄れる東京銀座にあるマデイラワインバーの名前は「マデイラ エントラーダ」。「エントラーダ」は「入り口」の意味。

鬼田知明 (有限会社鬼田酒店代表)



### ハッスル研修医

#### 報恩感謝



初期研修医 腰山 裕一

研修医一年目の腰山裕一と申します。大変珍しい名字ですよ。私の情報が誤りでなければ、この名字は高知県下で私の親族だけではないかと思えます。小さい時から「名前が目立つから悪いことはしないように!」と厳しく躾けられてきたので、真っ直ぐに育ったはずで(笑)

さて、タイトルの四字熟語は母校である土佐高校の理念として掲げられています。高校卒業から今年で15年、紆余曲折を経てやっとの思いで医師になることができました。

失敗だらけの私の人生ではありますが、これまで出会いに恵まれ、たくさんの素晴らしい恩師、友人そして家族に支えられてきました。また、研修先選ばせていただいた近森病院でも、まだ数カ月しか経ってはいませんが、尊敬できる先輩医師や同期の研修医、そして優秀なコメディカルスタッフに囲まれ充実した研修生活を過ごせております。

今後も努力を続け、地域にとって必要とされる医師になることが、これまでに私が受けた恩義に報いることになり、また感謝の意を示すことにつながると考えております。

こしやま ゆういち

### 第1回 近森会グループ 学術集会 2018

日時 2月10日(土) 13:10～17:40

■演題募集■

9月15日(金)～10月20日(金)

テーマ

「地域において  
患者さんに寄りそう  
医療サービスを提供する」

事務局 診療支援部企画課

**ニューフェイス** ①所属②出身地  
③最終出身校  
④家族や趣味のこと、自己アピールなど

**本館受付前 ● 水槽案内**  
僕らはみんな生きている 12  
**コリドラス・アエネウス**

またまたナマズの登場。いったいコリドラス属はどのくらいいるのか。およそ70種類ほどが確認されているようだ。前々回は「白コリ」だったが、この古代ローマの氏族のようなアエネウスは「赤コリ」とも呼ばれる。今回は少し趣向を変え、コリの繁殖をご紹介します。交尾は雄が雌に対し腹を向ける。雌は雄の生殖部から精子を吸い取り、腸から腹びれの



間に抱えられた卵に放出して受精が完了する。実に簡単(?)である。 編集室

**おめでとう**

**人の動き** 敬称略

**図書室便り** 2017年7月受入分

- Campbell-Walsh urology 11th ed Volume.1 ~ 4 / Alan J. Wein (editor-in-chief)
- Glenn's urologic surgery 8th ed / Thomas E. Keane, et al (editors)
- Smith's textbook of endourology 3rd ed vol. 1, 2 / Arthur D. Smith, et al (editors)
- 精巣腫瘍診療ガイドライン 2015年版 / 日本泌尿器科学会 (編)
- 膀胱癌診療ガイドライン 2015年版 / 日本泌尿器科学会 (編)
- 腎癌診療ガイドライン 2017年版 / 日本泌尿器科学会 (編)
- イラストレイテッド泌尿器科手術図鑑で学ぶ手術の秘訣第2集 / 加藤晴朗
- 病理検査技術教本 / 医療経営情報研究所 (編)
- SPSSで学ぶ医療系データ解析 第2版 / 対馬栄輝
- SPSSで学ぶ医療系多変量データ解析 / 対馬栄輝

《別冊・増刊号》

- 日本医師会雑誌第146巻特別号(1)生涯教育シリーズ92脳血管障害診療のエッセンス / 鈴木則宏 (他編)
- BRAIN NURSING 2017年夏季増刊 オールカラー決定版脳神経疾患の病態生理 ビジュアル大事典 / 高橋淳 (監)
- INFECTION CONTROL 2017年夏季増刊 オールカラー地域連携に使える!“はじめてさん”の感染対策マニュアル療養型病院、高齢者施設、単科病院・施設、在宅医療など / 森下幸子 (他編)

**2017年7月の診療数** システム管理室

|                   |         |
|-------------------|---------|
| <b>近森会グループ</b>    |         |
| 外来患者数             | 18,476人 |
| 新入院患者数            | 988人    |
| 退院患者数             | 1,012人  |
| <b>近森病院 (急性期)</b> |         |
| 平均在院日数            | 14.18日  |
| 地域医療支援病院紹介率       | 68.17%  |
| 地域医療支援病院逆紹介率      | 163.67% |
| 救急車搬入件数           | 571件    |
| うち入院件数            | 283件    |
| 手術件数              | 453件    |
| うち手術室実施           | 294件    |
| うち全身麻酔件数          | 169件    |

● **2017年7月 県外出張件数** ●  
件数 59件 延べ人数 103人

**編集室通信**

実りの秋、様々な旬が満載の季節です。ユネスコ無形文化遺産となった日本料理。中でも椀ものは小宇宙と呼ばれるほど季節感が大切にされ、一杯の器で旬の盛りのものだけでなく、走りの旬、名残の旬のものを共に供するのがならわしか。「季節」をより実感し愛しむ日本人ならではの感性。我が身の内にも備わっていると信じて、今の時間を満喫します。  
ひょん

# 「元気になってくれはったら」

## 趣味は「読書」

中井久夫という精神科医で、詩の翻訳やエッセイスト、文化功労者（2013年）としても有名な文筆家がいる。

趣味のいちばんに「読書」を挙げる津田先生が、この中井久夫の著書に出会ったのは、奈良で育った中学高校時代、図書館でたまたま手にしたのが最初だったという。中井の初期の著書は『天才の精神病理—科学的創造の秘密』とか、『現代精神医学の概念（サリヴァン著）』の邦訳など、題だけ見ても専門用語が多そうだが、それを手に取ったことを憶えているのが、いかにも読書家の津田先生らしい。

## 将来の治療法を夢みて研究生活

津田先生が僅か2歳のとき病死された父親は医者で、母親は薬剤師だし、祖母は高知県宿毛市の薬屋さんだった。将来の職業を意識した時期に、「目の前の人が元気になったらいいなあ…」という漠然とした思いもあって、医学部への入学は何か大きなきっかけというより、ごく自然の流れだった。

ところで、著書にどれほどの影響を受けたかは、津田先生自身も恐らくは意識できないだろうが、中井久夫は法学部で学び、結核で休学。方向転換後のインターン時代は研究も志したという経歴を持つ。津田先生は研修医時代、米国スタンフォード大学で4年半、実験研究のプロジェクトに参加してい



▲休みの日はのんびりしています

る。「現在は治療が難しくても、将来の治療法に何らか関われば」というのが動機だったという。

渡米は結婚後、一人息子が生後数ヵ月、物怖じしない妻と三人で始まった海外暮らしだった。研究生活以外で今日に残っているのは、ヴァイオリン教室が近所にあり、息子が3歳からその教室に通い始めたことだった。その息子は中学生になった現在も、なんと県外まで習いに行っているらしい。

## スタッフへの大きい期待

一方、患者さんに対しては、「元気になってくれはったら」という鷹揚さが、津田先生の特徴のひとつかもしれない。

病棟の山下佐和師長は、「スタッフのレベルを上げるためにと、疾患についてくわしく説明していただき、これぐらいのことはできるのが当たり前では、とスタッフに対する期待感も強い。患者さんにとってどうか先生の口癖だし、フットワークは軽い。大らかさと同時に、患者さんの病状報告については、漏らさずキビシク全部！という面もある」と、津田先生評。家族との仲良しエピソードをはじめ、家には鳥を8羽飼っていたり話題には事欠かない、スタッフからも近い先生である。

「手術によって患者さんが目に見えて元気になってくれるのが嬉しいから」と、外科を専門とすることに決めた。最近の外傷にも力を入れている。

## 患者さんの心のいたみに寄り添う身

両親の出身地であり、幼い頃から夏の楽しい思い出の多かった高知の近森病院への就職を果たした数年後。つまりいまから数年前になるが、当直入りの前に、いきなり吐き気に襲われ、救急外来で診てもらおうと心不全を起こしていることが分かり、緊急入院。「数々ご迷惑おかけし、たいへんお世話になりました。いまもって川井副院長はじめ、スタッフの皆さまにお世話になっておまして…」。

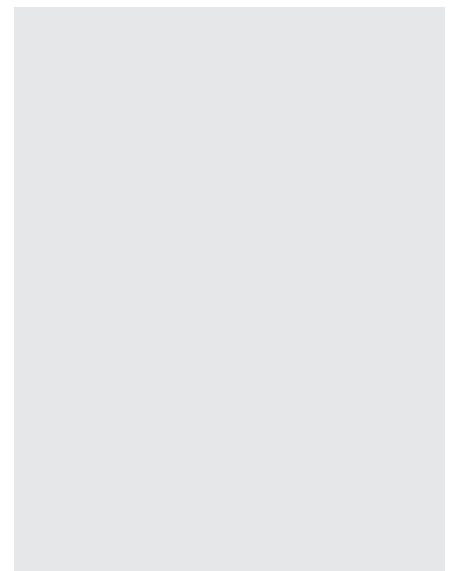


▲病状説明中

実は、就職早々には、ヒザのじん帯が切れて入院し…と、「その節も、皆さまに色々お気遣いしていただき…」。治療者と同時に、患者体験もしっかりしているのが津田先生の現在でもある。

だからということか、患者さんへの病状説明はたいへん丁寧だそうだし、「心のいたみ」にも敏感に在りたいと願っている。

スタッフとともに、入院の間は患者さんが少しでも過ごしやすい空間を持つてくれることを願い、退院後の生活も視野に入れ…。で、ここでもまた、津田先生の優しい瞳が、周りの空気を癒しているようだ。



# 近森病院・病院体験ツアー

近森病院整形外科 部長 上田 英輝



毎年恒例となった「病院体験ツアー」を開催しました。例年にはなく男子が半数を占めるようになり、医師・看護師だけではなく様々な職種が働いている病院・医療への関心の高さを伺われました。

グループに分かれて院内をくまなく

各職種 11 セクションを回って体感してもらいました。始めは緊張した面持ちの子供たちも、各ブースで繰り広げられる実技に汗をかき、手技を体験することで徐々に笑顔がみられるようになり、充実した2日間を送れたのではないのでしょうか。そして、自分の未

来を少しでも想像出来るようになればこの「病院体験ツアー」を開いた意義があるのだと思います。出来ることなら将来、医療人となってこの「ちかもり」で再び巡り合いたいものです。 うえた えいき

ヘリポートでみんなそろって



▼循環器内科●カテーテル挿入体験



▲ER ●ドクターカーに乗車  
▼リハ病院●免荷式天井吊り下げリフトによる歩行体験



▲NHK取材受けました

▼神経内科●ハンマーを使って反射を調べる



▼看護部●血圧測定



▼薬剤部●薬袋への記入体験



▲整形外科●創外固定の体験  
▼臨床検査部●血液型を調べる検査



▼形成外科●手術の縫合手技に挑戦



▲臨床栄養部●栄養補助食品の試食



臨床工学部●人工呼吸器を体験して▶

